心の目

連載エッセイ㉔④　札幌かに本家社長　日置　達郎

『愛知用水の歴史　②』

水不足に苦しむ地元・知多半島の現状を憂い、立ち上がった久野庄太郎氏。彼は、木曽川から用水を引く（愛知用水を作る）ことを考え、行動に移しました。そして、そんな彼の活動に触発されたのが濱島辰雄という人物です。濱島氏は、久野氏の活動を新聞で知るや急ぎ会いに行き意気投合、その三日後には二人で用水路計画地の沿線を歩き、調査と図面作りに取り掛かったとのことです。

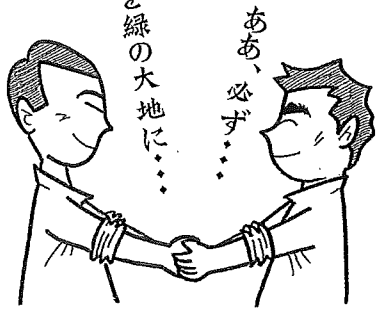
犬山市の尾張富士（愛知県犬山市南部、標高二七五ｍ）に二人で登り、用水路の路線計画を濱島氏が説明、二人は固い握手を交わし、必ず故郷を緑の大地に変えようと誓ったとのこと。絵になるような名シーンがここに展開されました。車の両輪の如きこの二人の出会いと存在なくして、愛知用水の実現はなかったと言えます。

さてこの濱島辰雄氏ですが、大正五年、豊明村（現豊明市）に農家の五男として生まれました。三重高等農林学校農学科を卒業したのち、南満州鉄道調査部へ入社します。赴任先の満州では、牧草を育てるために水を確保しなければならない状況に後押しされ、ダム計画の論文を書き上げました。終戦後は名古屋陸軍幼年学校の教師などを経て、農林学校の教師となります。濱島氏は干ばつの被害を何度も目の当たりにし、水不足に悩む農業を何とかしたいという思いから、木曽川から水を引き込む図面を書くようになります。

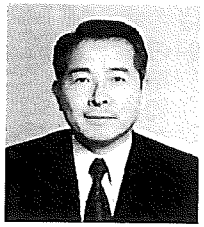
ちなみに、濱島氏が教師を務めていたのが安城農林学校、現在の「愛知県立安城農林高等学校」（安城市池浦町）であり、当社にとって社員の採用をいただく大切な実績校の一つになっています。また、地元の安城市が「日本のデンマーク」と呼ばれるほど農業先進地になったのは、この学校から輩出された優秀な人材によるところが大きいとも言われています。

また特筆すべきは、二人の活動は国や地方といった事業体ではなく全くの個人スタートでありかつ手弁当で進められたということでした。久野氏に至っては、活動資金を全て自身の田畑の売却等により捻出していたとのことで、後の昭和29年にはそれも使い果たし「破産宣告」を受けてしまいました。

様々な苦境にもめげず、その後計画図は三ヶ月で完成、毎日三時間程の睡眠で取り組んだとのことです。計画図は縦4ｍ・横2ｍにも及ぶもので、出来上がった「愛知用水概要図」を掲げ、のべ七十回に及ぶ地域での説明会に奔走しました。この努力が功を奏し、受益市町村（知多半島の一市二五町村すべてが参加）による「愛知用水開発期成会」が結成、これを原点にいよいよ中央への働きかけが始まるわけです。水不足の辛さを共有する二人の思いと行動力には、ただただ脱帽するばかりです。



（次号に続く）



著者プロフィール
昭和10年、三重県津市美杉町出身
札幌かに本家チェーン代表取締役
店舗設計や庭造りが趣味。
日本飲食産業協会副会長
名古屋まつり・英傑行列
第十代徳川家康役

平成28年5月1日発行
月刊「ほっぷ」5月号
掲載